

図書館とのお付き合い

神戸労災病院 院長 鷺見 正敏

「病院図書館」というこの雑誌の存在すら知らなかった私に原稿依頼が、しかも「巻頭言」なるものの執筆依頼が舞い込んできました。2014年4月1日付で、神戸労災病院の院長職を拝命して以来、多くの方々に前にしたご挨拶やたくさんの方々の挨拶を兼ねた執筆依頼をこなして参りました。そして、極めつけがこの「巻頭言」です。萎えそうになる「こころ」を振り絞って、「図書館」という言葉をキーワードに少しでもまともな文章を書くべく、努力してみます。

「図書館」という場所に頻回に通った時期は、この短くない人生の中でも2回はありました。最初は受験勉強という口実のもと「図書館」をダシにロクでもない生活を送っていた頃、そして2回目は逆に周辺環境が苦痛で「図書館」の存在に助けられた外国留学の頃です。

高校3年、自宅ではうるさくて勉強できないから、もっと静かなところで頑張ると言い訳しながら、母親に許しを請い、外出時の着用を決められていた制服をロッカーに押し込み、友人と連れだって大阪府立中之島図書館に通いました。しかし、言い訳は、全くもって本当に言い訳でしかなく、その口先の乾かない間に、梅田から中之島までの道すがら、御堂筋を直行するでもなく、ふらふらと必要以上に蛇行、道端の映画館の前で挑みかかるような原色溢れる看板の誘惑に負けるありさま。やっとたどり着いた図書館の中では、「しん」と静まり返った中、友人と血眼になって異性を物色、「うるさい！」

との叱声に萎縮しながらも、結局は問題を数題解いただけ。帰りも帰りで、梅田までの途中にどうしても通らなければならない光り輝くネオンの森に紛れ込んでしまう始末。この不屈きセンバンな受験生活にもかかわらず、現役で大学入学を成し遂げたのは、ただただ運の問題であったことは明らかで、結果として染みついてしまった「世間を甘く疎んじる」性向に、以降、苦渋を舐め、却ってより大きな苦勞（留年など）を被ることになったわけです。「図書館」とは、周りに煩わされることなく読書などの知的作業に集中できる環境を提供する場所なのですが、その頃の私にとってはただ大人の世界へ飛ぶための方便でしかありませんでした。

次は、カナダの病院図書館です。私は昭和52年に整形外科教室に入局し、翌年の昭和53年には大学院に進学しました。この大学院の在学期間中に教室から派遣され、昭和56年から昭和58年の2年間、カナダのオンタリオ湖畔にあるクイーン大学に留学することになりました。自分から求めて選んだ場所ではありませんでしたので、研究テーマはすでに「ウサギの実験性関節炎」というものに決まっていました。最初の数カ月は異国の地での生活に慣れることに必死、次の数カ月は研究室での研究の展開に必死の毎日でした。何度も試行錯誤を繰り返しながら、アパートのインフラを整えたり、車の整備が自分のできるようになったり、英語もトンチンカンながらもまあまあ通じるようになり、ウサギの実験をするための基礎実験も何とか軌道に乗り始めた頃のことです。「フッ」と「鬱」の状

態に陥っている自分に気づくようになりました。同じ卒業年次みんなはどどん一人前の手術をさせてもらい、整形外科医としての修練を完成させつつあるのに、私は、研究室の片隅で小さなスペースを貰っているとはいえ、周りのパートタイマー・テクニシャンの方たちとさほど変わらない、しかも、安く雇えて超勤を惜しまず頑張る健気な「アジア人テクニシャンもどき」といった風情でしたから。夏目漱石もロンドンでかなり参っていたようですが、この時期の私もだいぶ参っていました。帰国してからのことを含めて将来について思い悩む日々を無為に過ごしながらも、ある日、病院の大きな図書館に足を運ぶ機会がありました。いつも、私の周りでは、過度に陽気にはしゃいでばかりいて、しかも、無内容な会話だけに興じていた学生や医師たちが、この図書館の中では、「しん」と静まり返っていたのです。自分の目の前にある書籍の内容だけに「こころ」奪われ、黙々と知的作業に没頭しているコーカシアンの人たちを目の当たりにするのは初めてでした。研究室でいつも疎外感を感じていた私は、この良質な空間に感動し、「スキ」を見つけては「図書館」に足を運びました。「そうや、俺は整形外科医なんやから、整形外科の本を片っ端から読もう。」こう誓った私は、整形外科の教科書を片っ端から読み耽りました。「ウサギの実験」も、要領が解っ

てくると、やってるふりを見せることは可能で、結果が出ていてもまだ出ていないふりをしたり、もちろん「図書館」への言い訳は文献探しといった具合で、それまでに読破したことのない位の分量の本を英語で読み切ったこととなります。もちろん、そんなあれもこれも生活だったにもかかわらず、ウサギの研究も格好をつけることができ、しかも「賞」を戴くことになりました。

2年を経て帰国してからは、いっばいに張り切ったゴム紐が手から離れてコントの相方の顔へと一気に向かうかのように、ひたすら整形外科の臨床に向かって突っ走りました。「図書館」は、私にとって山中の修行場のようなものだったようです。その時に読み漁った本の内容はほぼ完全に霧散してしまいましたが、教科書を著した有名な先生方の「思想」は私の中で息づいているのではないかと勝手に合点しています。たとえ自然科学の教科書であっても、それは単に事実の羅列ではなく、文章の裏に著者の思いが見え隠れするものと思います。

「図書館」とは、ほぼ、縁のない人生を送っていても不思議のない人間が、2度だけ深く関わったことについて記述しました。「図書館」という空間が、魅力に満ちた空間であり続けていることは確かです。